

## 【第三週】神の家族とされるということ

### ●人生の第二の目的は「交わり」である

人間が罪に落ちたポイントはローマ1：21にあるように神を神としてあがめず、感謝もしなかったことにある。それゆえに、真の悔い改めとは、先週学んだ、人生の第一の目的の「礼拝」に立ち返ることに他ならない。自分の人生の目的を誤解し、的外れな生き方をしてきたことを悔い改め、イエスを自分の「主」と告白することから一連のプロセスが開始される。先ず、自分との関係の回復が始まるが、それは隣人、他者との関係の回復につながって行く。それが、今週の主題の「交わり」である。神は他人との関係の回復のために、教会を用いられるのである。

### ●「家族」は最初から神が計画されたこと

へブル2：10から分かることは、神が創造の最初から人間を神の家族の一員とするために、キリストによる贖いを計画された、ということである。神は人間をご自身との交わりのため、また人間同士の交わりのために創造された。罪はその交わりに破壊をもたらしたが救いは交わりを回復する。交わりの回復こそ救いの姿なのである。

### ●家族を通して愛する訓練と使命を受ける

教会は「神の家族」である。そしてクリスチャンはこの家族に属することによって1)互いに愛する訓練をうけ、さらにキリストの体として2)まわりの人々を愛する働きという使命を受ける。罪の本質は自己中心であり、クリスチャンは罪の性質を残しているので、クリスチャン同士であっても互いに愛することは勿論難しい。しかし希望がある。なぜなら、同じ御霊を受けているという共通の土台があるから、御霊に従順になればなるほど、互いの距離が縮まり、御霊の助けを受けることで、互いに愛し合うことが可能になっていくのである。その上で教会は世界に仕えていくのである。

### ●家族を愛することを選び、選び続ける

しかし何事も自動的に起きないことも覚えなければならない。愛の訓練とは「意志の訓練」に他ならない。キリストの命令への従順を選び、交わりから逃げないで留まることを選ぶ時に、自分自身の品性が練られ、忍耐力が備わり、成長させられていくのである。

### ●愛し合う姿こそが証しである

世には無い交わりこそ最大の証しである。教会が上記の訓練を通して互いに愛し合うことを学ぶなら、それが証しとなるのである。■

【今週の暗唱聖句】 40日の旅／第三週 交わり ローマ12: 5

大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、  
ひとりひとり互いに器官なのです。ローマ12: 5

ローマ12章、I コリント12章・・・教会がキリストの体であるという使徒パウロの教えはこの二つの書物のそれぞれ12章目に登場するのでいつでも開くことができるよう記憶しておこう。多くのことをこれらの箇所から学ぶことができるが、1) からだの各部がきちんと頭であるキリストにつながっていること（運動神経）、そして2) からだの各部分は「誰がため？」と聞かれたなら「我がため」ではなく「汝がため」に存在しているというポイントを覚えておこう。■

【祈りに関する学び（3）】

### パウロの祝祷から学ぶ（ローマ書）

「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたをキリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。」 15 : 4

「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和を持って満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。」 15 : 13

「どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。」 15 : 33

これら三つの祝祷は、ローマ15章の最初と真ん中と最後に出てくるが、みな同じ「どうか～～の神が（ホ、デ、セオス、テース～～/ギ）」と始まり、神のご性質の一側面を根拠に祝福の祈りが展開する。文化背景や気質の異なる者同士が同じ思いを持つためには、互いへの忍耐と励ましが必要となるが、それらを豊かに与えてくださるのは神なのだ。苦難の多い世の中で、私たちは喜び、平安、希望を必要とするが、それらの源である神は、求める者たちに豊かに与えてくださるのだ。

ところでこれらの祝祷の焦点は「個人の祝福」ではなく、信者の群である「教会」に向けられている。なぜだろうか。それは人が神に救われ「自己中心」の病[罪]からいやされるプロセスに入ったなら、救いは当然、他者との関係の回復として表現されていくはずだからだ。教会というところはかつての敵が共に食し、憎み合っていた者が祈り合う場となり、一般の世では実現され得ない、真の平和が実現する所となるはずなのである。その理想に到達するためには、私たちは神の祝福を是非とも必要としているのである。熱心に求めよう。■